社会人教育における反転授業を取り入れた授業デザイン
－学び直し大学院教育プログラムの形成期での試行を事例として－
Exploring the Design of Classes with Flip Teaching in Continuing Education
－Implementation of a Graduate Education Program for Executive Development－

西　尾　三津子

キーワード　社会人教育、学び直し、人材養成、反転授業、授業デザイン
continuing education, relearning, human resource development, flip teaching, class design

１．はじめに

日本企業の海外進出が広がる中、社会人教育において海外市場で活躍できるグローバル人材の養成が求められている。そのため、大企業のみならず、中堅・中小企業においても、海外展開で活用し得る専門的知識やスキルを習得させるための様々な研修が必要とされている。

現在、企業で行われている研修は、講義中心の知識伝達を主とした授業が多く、受講者は、講師の経験に基づいた講和を通して知識やスキルを習得する。また、業務の一環として会社からの指示で研修に参加した受講者は、当事者意識が希薄になりがちである。そのため、目的意識をもって学習に取り組み、自らの業務と関連付けて新たな知識を獲得しようとする能動的な意欲が喚起しにくい。その上、多くの企業は、年間経営計画の中に企業内・外研修をイベントという形で位置付けているため、参加者主体の学びが機能しにくく、達成感や学習成果の低い研修というイメージが伴うのである（吉田 2006）。

このような問題から、既習経験と新たな知識を統合させ、実務に応用可能な実践的知識として習得するための教育プログラムの構築が求められる。受講者が、学習に意味付けをしながら能動的に学ぶことで、「教えないで学べる研修」（鈴木 2015）としての学びを活性化させることが可能になる。そこで、本研究では、社会人教育において人材養成を意図した効果的な授業をデザインするために反転授業を取り入れた授業を構想した。

反転授業とは、対面授業での一斉講義や説明と、宿題としての課題解決や応用とを反転させる授業形態である。これは、説明や解説等の知識伝達を、事前にインターネットを用いて行い、対面授業では個々の学びを前提として議論したり発展的な課題解決に取り組んだりして、学びの深化を図ることをねらったものである。現在、初等・中等から高等教育の学校現場で導入されつつあり、山口大学等の実践事例が報告されている（小川 2015）。

社会人教育における反転授業の実践としては、関西大学が実施している産官学の教育プログラムがある。ここでは、海外子会社の経営を担う予定者に対して、現地に関わる各種情報、地理歴史、経済情勢等に加え、経営に携わるための理論的で効果的な教育プログラムを提供することで、次世代の経営者を育成を目指している（関西大学 2015）。当プログラムの実践事例を通して、反転授業は対面授業の理解を深めるために効果的であり、学習への意欲を向上させるのに一定の効果をもたらすことを報告している（西尾・宗岡 2015）。

そこで、本研究においては、時間的、空間的に制限のある社会人にとって、反転授業がより効果的な学習を可能にするために、反転授業と対面授業を連動させた授業デザインを提案する。

２．研究の目的

本研究の目的は、社会人教育において、能動的に学ぶ人材を養成するための授業デザインを提案することである。多忙な社会人にとって、効果的で効率的な学習の継続こそが、能動的に学ぶための大きな鍵となり得ると考えるからである。

本研究では、反転授業を取り入れた効果的な授業の要件を検討するために、「海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム」を取り上げる。この事例において、学習効果を促した授業の要因を分析することで授業のデザイン要件を検討する。そして、反転授業を取り入れた社会人教育の新たな授業デザインを提案する。

3.「学び直し大学院教育プログラム」の概要

関西大学は、平成26年度の文部科学省の「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」の委託事業として、「海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム」の開発と試行を行っている。これは、大学院が産業界等と協働して、海外子会社における経営者として必要な高度で専門的な知識や技術を身に付けることを意図し、社会人を対象に経営管理能力の育成を図るための「学び直し」を支援する教育プログラムである。

当プログラムでは、平成26年度(2015年２月)から試行的に授業が開始され、平成 27 年度前期（2015年４月～９月）では、「専門教育プログラム」と「実践基礎教育プログラム」をあわせた計10科目の授業を実施した（**表１**）。

表1　授業科目

科　目	コマ数
専門① ASEANの地理・歴史	2
実践① 演習（集中ケーススタディ）	5
専門② ビジネス英語Ⅱ	5
専門③ ASEAN発展論	4
専門④ 企業会計	2
専門⑤ 海外派遣者の心理・健康管理	2
専門⑥ ビジネス英語Ⅲ	5
実践② シンキングチャートの活用	2
専門⑦ グローバル経済	2
実践③ ASEANでの子会社経営	7

1コマ=90分授業

当プログラムに参加した受講者には、①受講に対する目的意識が明確　②学習意欲が高い　③学習時間の確保が困難　④実務経験や既習知識の差異が大きい　という特徴があることを事前のヒアリングを通して得た。そのため、社会人向けへの配慮をふまえた効果的な教育方法として、反転授業と対面授業を組み合わせたブレンディッド学習を実施している。

ここでの反転授業の目的は、学習を効果的、効率的に行うことで理解の促進と思考の深化を図ることである。受講者は、対面授業の１ヶ月前に配信された反転授業ビデオを用いて自己のペースで事前学習に取り組む。１回の授業シリーズに対し、社会人の実態やニーズを考慮した反転授業を実施している。受講者は事前に授業目的や概要を確認し、対面授業で学ぶ際に必要となる知識を習得する。また、授業担当者から出された課題について既習の知識や考えを整理する。これは、講義を受ける際の条件を整え、異なる背景をもつ社会人が対面授業での理解を促進させ、他者との交流を通して思考を深化させるための重要な学習といえる。

2015 年４月から８月までに実施された反転授業には、①対面授業での理解を促進する　②受講者の実務経験や既習知識を整理させる　③受講者の目的意識を高める　という３つの効果があることが分かった。さらに、その効果には、「学習の意味付け」、「学習の目的意識」、「学習内容と構成」という３つの要因が作用していることが分かった（Muneoka・Nishio unpublished)。 そこで、これらの要因を分析し授業を設計することで、より効果的な授業を構築していくことができると考える。

4．研究の方法

本研究では、2015年４月からの５ヶ月間、当プログラムに参加し10科目の授業を受講した22名を研究対象としている。授業の効果をみるために、４月から８月の間に科目ごとのアンケート調査を行った。アンケート調査の分析結果と併せて授業観察記録を活用して考察を行う。

アンケート調査は、受講者の学習態度や意欲、学習成果に関する 12 の項目について、「５：強くそう思う～１：全くそう思わない」の５段階尺度で問うものである（**表２**）。その中で、（問３）、（問６）、（問７）の３つの項目に着目した。さらに、結果の考察にあたり、反転授業の成果や課題に関する自由記述（問 13）を活用するようにした。

表2 アンケート項目

問 1	授業を受けるにあたり授業に関する基礎的な知識があった。
問 2	授業を受けるにあたり書籍や情報を調べるなどして予習に取り組んだ。
問 3	反転授業は、対面授業を理解するのに役立った。
問 4	授業によく出席していた。
問 5	授業で学んだことについて書籍や情報を調べる等して復習に取り組んだ。
問 6	授業を受けて知的好奇心が刺激され、自分の意欲が高まった。
問 7	授業で既習知識やスキルを活用して課題について考えることができた。
問 8	他者との協働学習やディスカッションに積極的に参加することができた。
問 9	今後もこのような授業を受けて、さらに自分の能力を高めたい。
問 10	授業の内容や方法は自分のニーズに合致するものであった。
問 11	授業の難易度や進度は自分の理解を深めるのに適切であった。
問 12	授業は自分の業務に役立つものである。

５．結果と考察

アンケート調査の結果、＜強くそう思う＞と＜そう思う＞を肯定意見とし、＜そう思わない＞と＜全くそう思わない＞を否定意見とした（**表３**）。

意欲の向上に関する項目（問６）については、10科目全てにおいて肯定意見が86%以上であり、「反転授業は学習意欲の向上につながる。学習のきっかけとしてすごくいい」や「自分の中で何をポイントにするのかが分かり、意欲が出てくる」という受講者コメントから解釈すると、反転授業が意欲の向上に寄与していると考えられる。

表3 アンケート調査結果

プログラム（科目）	回答（人）	問 3	問 6	問 7
専門教育プログラム①	17	82	94	47
		0	6	18
実践基礎教育プログラム①	16	75	100	100
		0	0	0
専門教育プログラム②	20	30	95	75
		0	0	15
専門教育プログラム③	21	67	86	78
		0	11	6
専門教育プログラム④	18	44	89	67
		11	6	11
専門教育プログラム⑤	15	67	87	87
		0	0	0
専門教育プログラム⑥	13		92	69
			0	15
実践基礎教育プログラム②	14		100	86
			0	0
専門教育プログラム⑦	14	83	100	89
		0	0	0
実践基礎教育プログラム③	15	78	94	89
		0	0	0

回答欄の上段は肯定回答率(%)、下段は否定回答率(%)
空欄は反転授業を実施していない

また、反転授業は対面授業の理解を深めるのに役立った（問３）という肯定意見が２科目を除いて 67%以上であった。これは、「前もって予習することで、先生がどこに重点を置いて講義をするのかが分かり、対面授業での理解が深まった」や、「反転授業で予習をすると、どこが分からないのかが自分で分かるので、対面授業での理解が深まり質問もすることができる」という受講者のコメントから解釈すると、反転授業が対面授業での理解を深めるために機能していると考えることができる。一方、肯定意見が低かった２科目について、授業観察の分析をした結果、反転授業の中で概念的な内容や多様な課題が提示されたことや、反転授業と対面授業との関連性が希薄であったため、学習効果が実感しにくいものであったという共通の意見がみられた。

既習知識やスキルを活用して課題について考えることができた（問７）という肯定意見は、実践教育プログラムでは 86%以上であった。一方、専

門教育プログラムでの肯定意見は 47%～89%の範囲にあり、そのうち５科目においては６％～18%の否定意見もみられた。これは、受講者の職種やニーズの差異によるものであると考えられる。また、受講者からは、「事前に出された課題で授業をイメージして、ディスカッションする上でも非常に有用だったと思う」や「反転授業をみて自分が知りたかった分野ということであれば、積極的に授業に参加しようと思う」というコメントがあった。このことから、社会人の既習知識や実務経験を対面授業の内容に結びつける上で、反転授業がもつ意義は大きいと考えることができる。

授業科目の中で、とりわけ授業評価が高かった実践教育プログラム①は、反転授業に関する肯定意見が 75%にも関わらず、(問 6) や (問 7) では、肯定意見が 100%となっている。この要因として、授業担当者から提供された事例課題について受講者同士で協働学習をする活動と、それらの成果をふまえて、受講者が自己の具体的な業務場面を想定して主体的に課題解決に取り組むという２段階の学習活動が効果的であったからであると考える。同時に、異なる企業文化をもつ受講者同士が、他者との交流を通して新たな視点を獲得することで、より質の高い学習の成立につながったといえる。

また、専門教育プログラム⑦は、受講者全員が授業の成果として意欲の向上を実感している。これは、授業内容と受講者の業務との関連が密接であるだけでなく、海外事業体で活躍するための体系的知識の提供に併せて、実践的な場での実務活用への道筋が提示されていたからであると考える。

６．反転授業を取り入れた授業デザイン

図１は、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインを図式化したものである。「学習の意味付け」、「学習の目的意識」、「学習内容と構成」の要件を満たす反転授業を活かして効果的な授業をデザインする際、「協働学習」、「学び方の習得」、「実務への活用」といった要件が必要であると考えた。

経験の想起の段階としての反転授業の要件は、以下の３つである。

・**「学習の意味付け」**を通した価値の実感

社会人受講者は、学習内容を実務と関連付けることで学習の価値を実感する。そして、事前の反転授業を通して、授業内容の価値や自身の業務との関わりを意味付けしながら学習意欲を高める。また、自ら判断し、計画的に予習に取り組むことにより既習経験や知識を再認識することができる。

・**「学習の目的意識」**の明確化による実践的知識の獲得

受講者は、事前の反転授業を通して学習の目的を確認することで、自身が到達すべき姿を明確にもつことができる。同時に、自らの学習姿勢を問い直し、目的意識を高めるとともに、実務に活用できる実践的知識の獲得に活かすことができる。

・学習意欲の向上と持続を促すための反転授業の**「学習内容と構成」**

社会人受講者の場合、特に、反転授業ビデオを視聴する際の時間や場所、方法を考慮する必要がある。簡潔で明瞭な学習内容と分量、通勤途上の車中等の場所でも視聴できるような配慮も必要である。視聴時間は 5 分から 10 分をひとまとまりとして、チャプター等で構成の工夫をすることで、視聴場所の制限が軽減される。また、対面授業での学習内容と連動させた適切な学習レベルと学習量の事前課題を提示する。授業担当者が行う e－learning を用いたフィードバックは、受講者の意欲を持続させるのに効果的である。さらに、e－learning 教材に加えて紙媒体での資料提供も学習効果を高めるものである。

知識の獲得の段階としての対面授業の要件は、以下の３つである。

・受講者同士が学び合う**「協働学習」**の場の設定

対面授業の中に、受講者同士が学び合う協働学習を意図的に位置付けることにより、受講者は能動的に学習へ参加することができる（西尾 2015）。とりわけ、業種や業務経験が異なる受講者同士が学び合うことで、新たな見方や考え方に気付き、問題解決の際の多面的な視点を得ることができる。

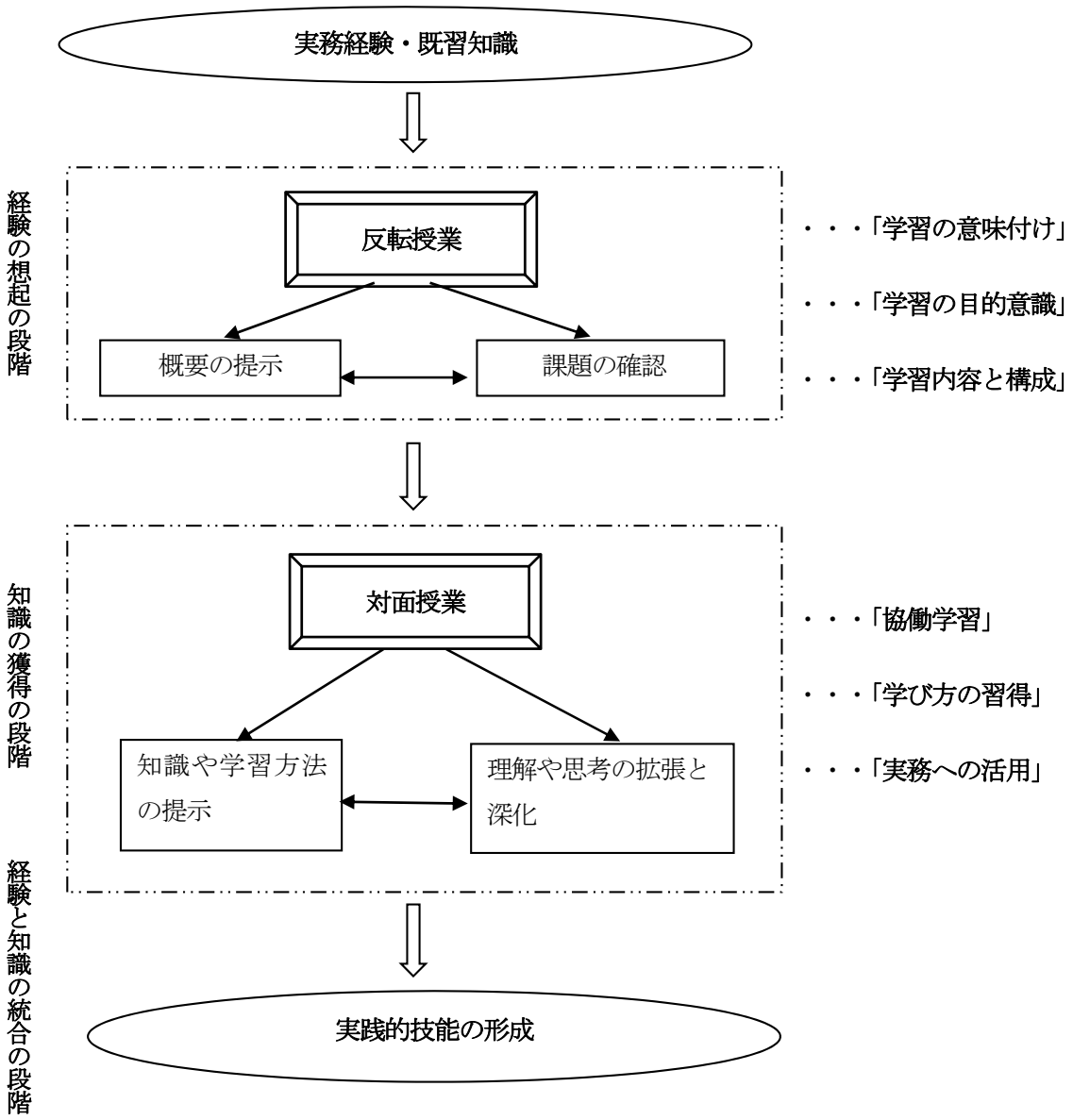

図1　反転授業を取り入れた授業デザイン

・実践事例を通した「学び方の習得」

授業の課題として取り組む具体的事例や、授業担当者によって語られる経験談には一定の解決法が提示される。しかし、受講者が実務の場で直面する課題は、流動的で予想不可能なものが多く、その背景に複雑な要因が輻輳していることがある。そこで、受講者は、具体的な事例から習得した知識やスキルを一度抽象化した後、それを応用可能な知識や技能へ変換する必要がある。そのプロセスを身につけるためには、学び方を習得することが肝要となる。

・「実務への活用」に向けた実践的知識の獲得への方向付け

授業展開の中で受講者自身による振り返りの場を設定し、学んだことが実務にどのように役立つか、そのためにどのような能力が必要であるのかということを確認する場を設けることが必要である。そうすることで、学習への価値を実感するとともに、自己の課題をより明確にすることができる。このような知識獲得の段階を経て、実践的技能を形成する「**経験と知識の統合の段階**」へと向かうと考える。

7．まとめと課題

本研究では、社会人受講者が能動的に学ぶために反転授業を取り入れた授業デザインを提案した。社会人教育における授業デザインは、学校教育とは異なる要件を有するものであると考える。本研究においては、既習知識や実務経験をふまえた反転授業を取り入れた授業デザインを提案することで、今後の社会人教育を行う上での示唆を得ることができたと考える。

本研究の今後の課題としては、現在、実施されている学び直し大学院教育プログラムにおいて、本研究の成果としての授業デザインを用いた検証が必要である。今後、社会人教育において効果的、効率的な授業を実施していくための授業デザインの要件を提起していきたいと考える。

参考文献

E-learning 戦略研究所（2015）「反転授業に関する定点調査報告書」

関西大学（2015）「海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム」中間成果報告書

Muneoka,T.,Nishio,M. “An Attempt at Flip Teaching in Continuing Education-Implementation of a Graduate Education Program for Executive Development-” (unpublished) Journal of Accountancy,Economics and Law No.10 March 2016,pp.11-27 :School of Accountancy Graduate School of Kansai University,Osaka,Japan

西尾三津子（2015）「社会人教育における反転授業の可能性に関する一考察」『日本教育工学会第 31 回全国大会講演論文集』pp.499-500

西尾三津子・宗岡徹（2015）「社会人教育における反転授業の効果」『日本教育メディア学会第 22 会年次大会研究発表集録』pp.182-183

文部科学省（2016）「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/manabinaoshi/index.htm（情報取得 2015/1/10）

産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm（情報取得 2015/1/23）

小川勤（2015）「反転授業の有効性と課題に関する研究－大学における反転授業の可能性と課題－」『山口大学大学教育機構紀要』12，pp.1-9

重田勝介・布施泉・岡部成玄（2013）「オープン教材を用いた反転授業の実践と分析」『日本教育工学会第 29 回全国大会講演論文集』pp.223-226

重田勝介（2014）「反転授業 ICT による教育改革の進展」『情報管理』56，pp.677-684

鈴木克明（2015）「研修設計マニュアル－人材育成のためのインストラクショナルデザイン－」北大路書房

吉田新一郎（2006）「『学び』で組織は成長する」光文社新書

西尾三津子（関西大学教育推進部）